荒子川へテラピアの産卵床を見に行きました。

平成２１年６月２９日　天気 雨　水温 22℃
技術士（衛生工学）　本　堀　雷　太

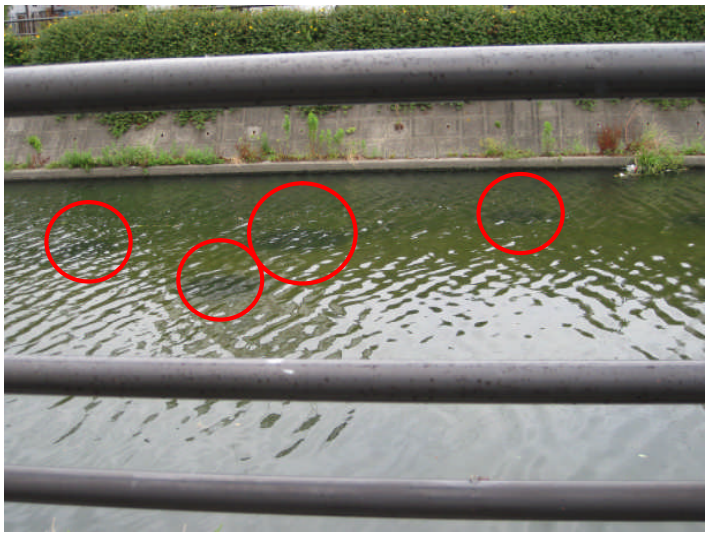
今回の観察場所について

名古屋市中川区荒中町付近の荒子川流域は、篠原ポンプ場（右写真）から排出される温排水の影響で水温が一定しており、テラピアの越冬場所となっている。

また水深は浅く、水底が砂地であるため、初夏にはテラピアの産卵場として利用されている。

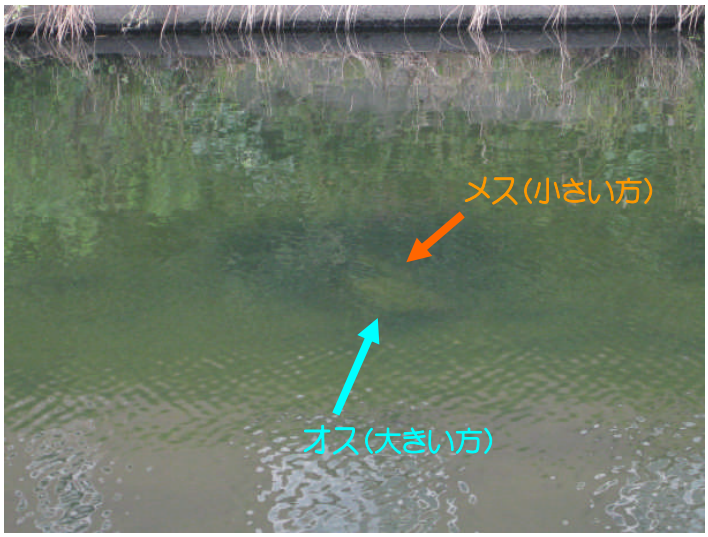
テラピアの他には、コイやマブナ、ナマズ、ライギョ、ブラックバスなどが1年中目視で観察することが可能。

交通:あおなみ線　南荒子駅下車　徒歩10分



テラピアの産卵床（赤丸で囲んであるところ）

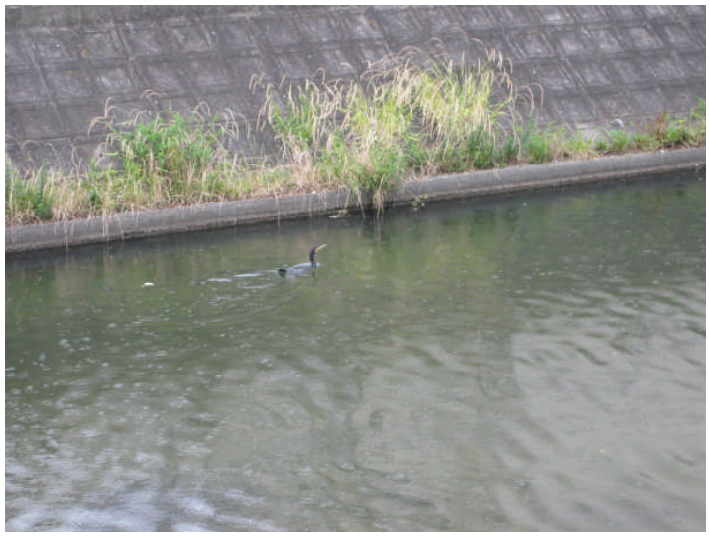
テラピアは水温 24℃～32℃では季節に無関係に産卵し、雄が水底に浅い巣穴を掘って産卵床を造ります。荒子川では初夏～盛夏にかけて産卵しているようです。雌は400～2000 個の卵を生み、卵や孵化したばかりの稚魚を口の中に入れて保護します（マウスブリーダー）。



産卵床を守るテラピアのつがい

他の魚や鳥が巣に近づくと大きな固体（オス）が体当りして追っ払っていました。自分よりはるかに大きなコイに体当りするのはスゴイですね。

産卵に参加しないテラピアは群れを作ってウロウロしていました。婚姻色は顕れていませんでした。



産卵床のテラピアを狙って鵜が飛んできました。残念ながら1匹食べられてしまいました。